

◆法華寺阿弥陀浄土院の調査—第312次

1. 調査区の概況

平城京左京二条二坊十坪は法華寺寺域の南西隅にあたり、天平宝字五(761)年に光明皇太后の一一周忌の斎会が行われたと『続日本紀』にみえる阿弥陀浄土院の推定地である。坪中央やや西よりに立石があり、早くから園池の存在が想定されてきたが、坪の北半部で行われた既調査(第80次:1972年度、第183-21次:1987年度、第282-6次:1997年度)では、建物跡等を検出したものの、池に関わる遺構を確認していない。このほか、第281次調査(1997年度)では、坪南東隅に、法華寺寺域南辺中央の門を検出している。

今回の調査は推定阿弥陀浄土院遺跡の範囲確認を目的とし、坪南半のほぼ中央に細長い3本の調査区を設定した(図60)。ここでは、南北に長い調査区を東区、東西に長い調査区のうち北側を北西区、南側を南西区とよぶ。遺構検出面は標高60.70m前後。調査面積は計355m²で、調査期間は2000年2月28日から4月25日である。



図60 調査区位置図 1:5000

2. 検出遺構

調査の結果、阿弥陀浄土院に伴うと推定される奈良時代の園池跡等を検出した(図61)。以下、順に説明する。

奈良時代の遺構

SG7700 調査区全体に広がる園池遺構(口絵)。東岸、南東岸の一部を検出したが、その他の岸は調査区外にのびる。池の最大長は45m以上。池岸には、長径60~85cm程度の護岸石を並べ、灰白色砂混青灰白色粘土を裏込めとする。護岸石が抜けている部分も、この裏込め土により池汀線をほぼ復原できる。護岸石は、立った状態のものではなく、すべて横置き、あるいは立石(景石)とおぼしき石は倒れた状態で遺存していた。池岸は複雑に入りし、東区のやや北寄りで、池岸に挟まれて西にのびる岬がある。池底には、径30~50cm程度の石を、平坦面を上向きに揃えて一面に敷く。池底の石敷がない部分には礫混暗灰色砂を検出した。

SK7694 池岸に並ぶ小土坑群。その多くは、位置や状況から、護岸石を抜き取った痕跡と見られる。その他に、立石(景石)を倒し込んだために生じた空隙とみられるものがある。こうした状況から、池の汀線に沿って、景石をところどころに立ち上げた石組みの護岸が連続していたものと考えられる。

SX7695 SG7700にある中島。南西区中央で東岸と西岸を確認した。幅12.5m以上。黒色砂質土をベースとする。

SX7681 SX7695の南岸にある入江状の遺構(図61-4)。池護岸石の裏込めと同質の土を、池に向かってなだらかに下がるように敷く。外縁沿いには、長円形に縁石の抜取穴が並び、その内側を舟底状に浅く窪ませる。平城京左京三条二坊六坪(宮跡庭園)の園池SG1504で検出した舟入り状の施設SX1468に類似したものか。

SD7682 調査区東方からSG7700南東岸へ流れ込む、幅約1.2mの東西溝。

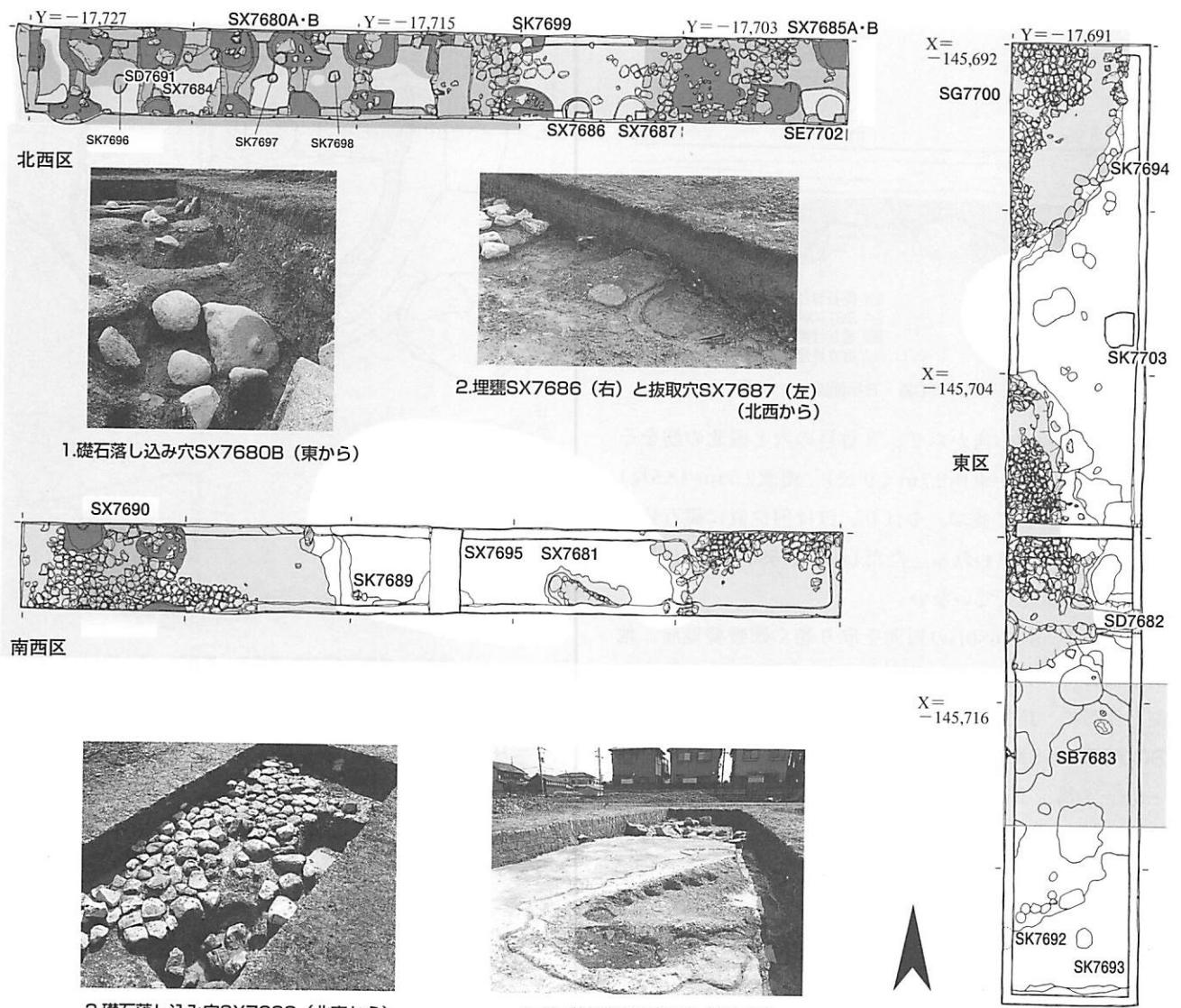


図61 第312次調査遺構平面図(1:200)と主な遺構

SX7680A・B 北西区西半でまとまって検出した礎石落し込み穴群(SX7680B)と、その下層の掘立柱柱穴群(SX7680A)。調査区の北、南辺に沿って、東西方向8基、南北方向2基の計16基の穴が2列に相対して並ぶ。北東隅の1基は下層柱穴のみ確認した。

SX7680Bの穴の大きさは1辺1.5~2m程度で、埋土中の石は、礎石(径1~1.5m程度)だけでなく、根石状のものもある。とりわけ、出柄が付く礎石と、長円形の礎石が注目される(図61-1)。

これらの礎石落し込み穴は、東西方向が約2.7m(9尺)のほぼ等間隔、南北方向の間隔も約2.55m(8.5尺)でそろうことから、本来の礎石据付穴とほぼ同じ位置で掘られたものとみられる。したがって、この位置に礎石建物が存在した可能性が高い。礎石落し込み穴の周囲には池底の石敷が存在せず、礎敷整地層SX7684(後述)が取り巻く。穴の埋土中より中世の土器、瓦が出土した。

SX7680Aは、北側の列の東西両隅と、南側の列の下層で確認した。これ以外の場所ではSX7680Bにより完全に壊された可能性がある。ほぼ同じ場所で、掘立柱建物か

ら礎石建物へ建て替えられたとみてよからう。

SX7680A の掘形と抜取穴は奈良時代の地山面から切り込み、池底の堆積土によって覆われ、SX7680Bは、この池底の堆積土の上面から掘り込まれている(図62)。

SX7685A・B SX7680A・Bから東へ約3.3m離れて検出した礎石落し込み穴群(SX7685B)と、下層の掘立柱柱穴群(SX7685A)。東西方向に3~4基、南北方向2基の穴が相対して並ぶが、北側の東から2番目には穴が確認されず、西端の2基は下層のみ確認した。また、北西区東半のほぼ中央には幅2.6mの大きな穴が1基あり、ここへ周囲の礎石をまとめて落し込んだものと思われる。これ以外の穴はSX7680A・Bとほぼ柱筋をそろえて検出されているが、穴の間隔は若干狭く、約2.4m(8尺)程度である。しかし両者の状況は基本的に類似しており、SX7685A・Bは、SX7680A・Bと同様、この場所に築かれていた建物跡の可能性が高く、やはり掘立柱建物から礎石建物に建て替えたものと思われる。

SX7690 南西区西端付近で検出した礎石落し込み穴群(図61-3)。SX7680Bの南列から南へ約15.5mの位置に

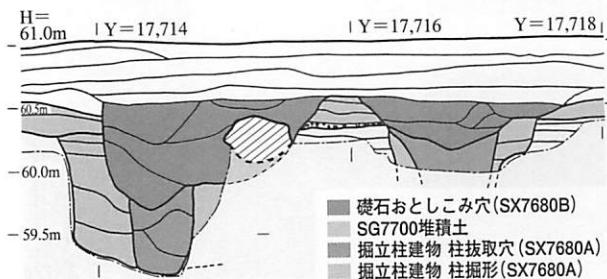


図62 SX7680A・B断面図 1:60

あり、SX7680Bの西から2、3番目の穴と南北の筋をそろえて4基の穴が東西2.7m(9尺)、南北2.55m(8.5尺)の間隔で相対して並ぶ。やはり、ほぼ同位置に礎石建物があった痕跡と思われる。ただし、SX7690の下層には掘立柱柱穴を確認していない。

SX7684 SX7680Bの周囲を取り巻く礎敷整地層。地山上面に薄く残存する。他所に存在する池底の石敷の標高と比べて、15cm前後低い。

SD7691 SX7680Bの穴を東西、南北につなぐ幅約0.6~0.8mの溝。5条検出した。埋土はSX7680Bと共におり、根石状の石も投棄されているのでSX7680Bに関連する遺構とみられるが、礎石建物の束柱に関わる遺構の可能性もある。

SK7696・7697・7698 SX7680Bの相対して並ぶ礎石落し込み穴列のほぼ中央で、東西に筋をそろえて並ぶ小穴。位置からみれば、SX7680A・Bに伴う床東あるいは足場穴の可能性もあるが、SK7696とSK7697の間が1基抜けるうえ、やや浅いことから3基の小土坑と判断した。

SB7683 SG7700南東岸の陸地部分から東に延びる東西棟掘立柱建物。桁行2間以上、梁間2間。身舎の西妻部分が調査区西端にかかる。妻側の中央の柱穴には柱根が残存する。柱間寸法は9尺(約2.7m)等間。

SK7692・7693 SB7683の南側で、西妻柱筋の延長上(SK7692)と、その東隣の柱筋の延長上(SK7693)にある土坑。SB7683の南庇となる可能性もあるが、穴そのものは非常に小さい。庇だとすれば、出は12尺(約3.6m)となる。

SK7689 中島SX7695の西岸に位置する小土坑。

SK7699 SX7680Aの北東隅の柱穴を切る小土坑。埋土中におびただしい量の檜皮が詰まっていた。

SX7686 北西区東半の調査区南端で検出した埋甕遺構(図61-2・図63)。地山を掘りこんで須恵器の大甕を埋めたもので、下半部のみ残存。調査区内にかかるのは北半分のみ。甕の径は約1.0mで据え付け掘形の径は約1.2m。土層の層序関係からみて、池と併存したものと見られる。

SK7687 SX7686の0.8m東側に並んで検出されたほぼ

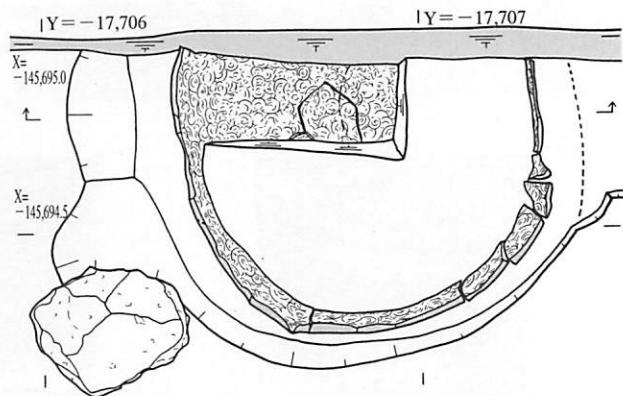


図63 埋甕SX7686平面図・断面図 1:20

同大の土坑。埋甕の抜取穴とも考えられる。

中・近世、近代の遺構

SX7701 北西区西半で検出した、奈良時代～中世の瓦、礎を多く含む整地層。奈良時代の遺構の上層に位置する。第281次調査で検出したSX7119と状況が類似する。

SE7702 北西区東南隅で検出した井戸。SX7685の穴の1つを壊して造られている。割竹を輪状に組んで井戸枠とする。埋土中より近代の陶磁器が出土した。

SK7703 東区北半で検出した土坑。埋土中より近代の陶磁器が出土した。

この図は以下の結果を合成して作成した。

北グリッド(図右):

38~42NS (地表下50cm前後)

南グリッド(図下):

40m以西—16~19NS

(地表下30cm前後)

40m以東—45~48NS

(地表下60cm前後)

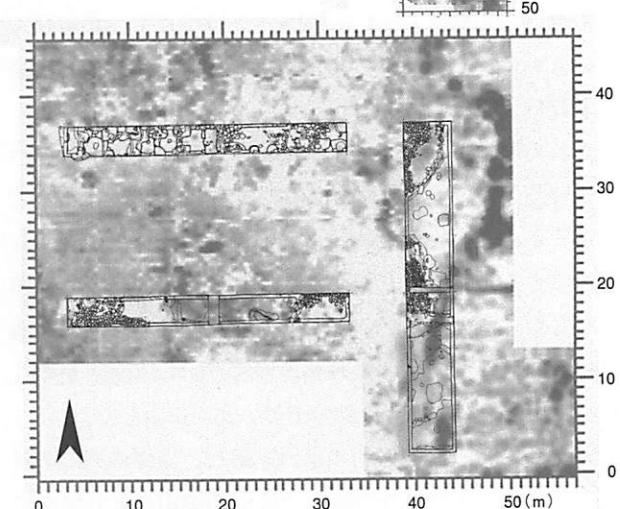


図64 第312次調査区とその周辺の地中レーダー探査図 1:800

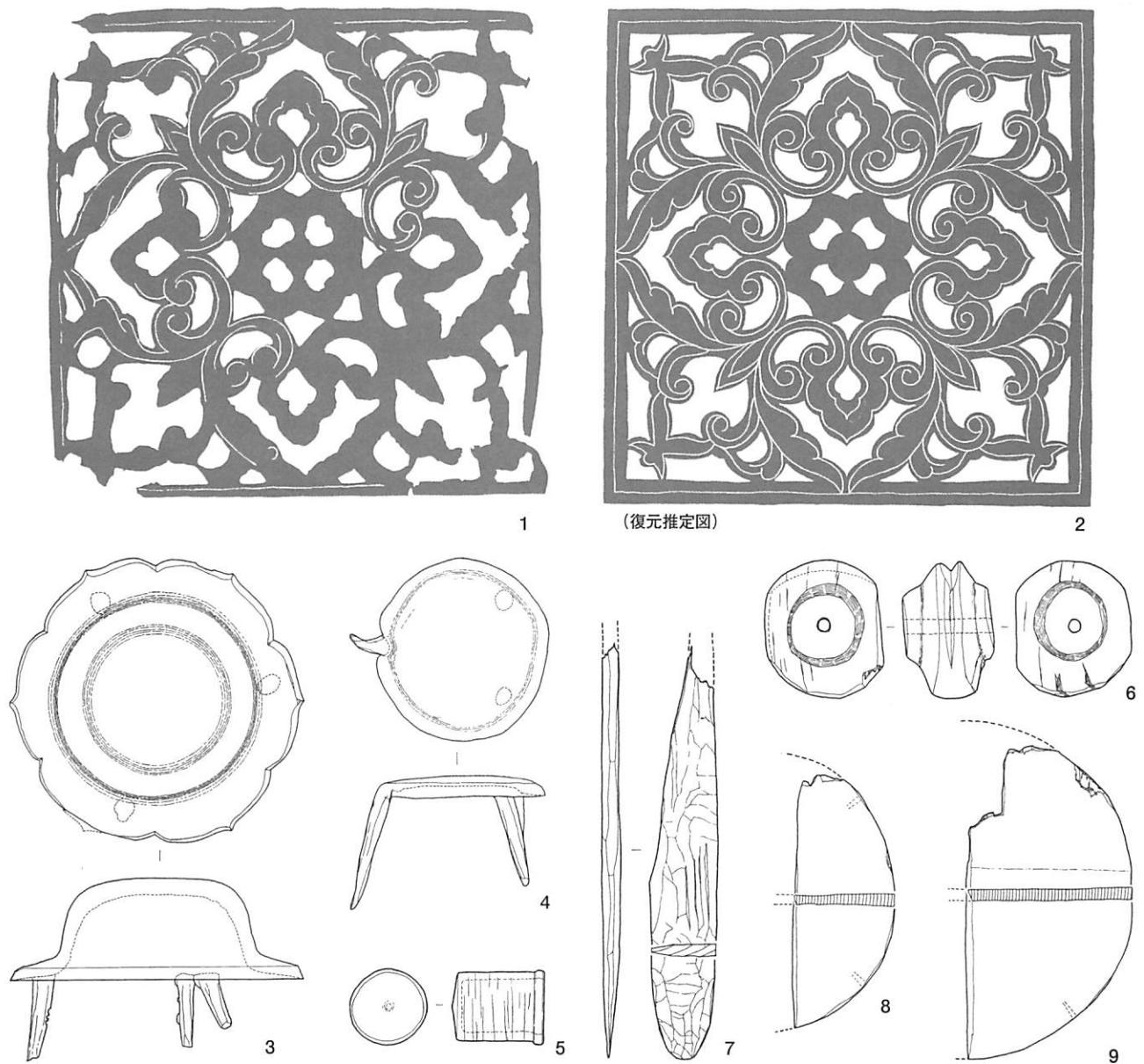


図65 第312次調査出土金属・木製品 1・2は2:3、3~5は1:2、6~9は1:3

なお、発掘調査終了後、調査地およびその周辺で地中レーダー探査をおこなった。その結果、池岸の北東辺、中島の北辺、岬の先端の位置を示す反応があった(図64)。さらに、弱い反応ながら、SX7680Bがさらに北側と西側に延びる可能性のあることも判明した。また、東区のすぐ東側に、今回確認した池岸より低い位置で、もう1条の石列の反応が認められた。これは石組みの池岸とみられることから、この池岸を東岸とする下層の池があることを示唆し、非常に注目される。

(清野孝之)

3. 出土遺物

金属製品 図65の1～5は、いずれも池SG7700の池底の石敷直上から出土した金銅製品。1は垂木先飾り金具。

11.2cm×11.0cmの、ほぼ正方形を呈する。厚さは0.6mm。縁取りの内側に対葉花文を左右、上下対称形に配置し、透し彫りの文様の輪郭線を毛彫りで表現している。表面の一部に鍍金が残るが、概して遺存状態は良くなく、文様部分の一部は欠失し、毛彫りの大半は錆化のために確認しがたい。2は1をもとに推定復元した図。3は釘隠し金具で、座金の平面形は六花形をとる。直径8.9cm、高さ3.0cmで、裏面に最長2.5cmの脚釘が3ヶ所に付く。鋳造であり、裏面は鋳放しであるが、おもて面は丹念に研磨が施される。4も釘隠し金具。直径5.4cm、高さ0.6cmの鋳造品で、裏面に最長3.5cmの脚釘が3ヶ所に付く。5は直径2.2cm、高さ2.8cmの軸頭金具。鋳造品で、内外面に回旋状の削り調整の痕跡が残る。内径からすると、装着した軸の



1. (緑釉) 水波文瓦
2. 軒丸瓦 6138M型式 (1:6)

図66 第312次調査出土瓦塙

直径は1.5cmほどとなる。なお、同じ石敷直上から萬年通寶(760年初鋤)が1点出土している。

木製品 図示した木製品は、いずれも池SG7700の堆積土最下層から出土したもの。6は滑車状製品。未製品であれば、墨壺の糸車のような用途も考えられる。7は細身の杓子。8、9は曲物底板。その他に少數の籌木(ちゅうぎ)がある。注目すべきことに、池堆積土最下層から、おびただしい量の建材削り屑が出土した。池発掘範囲のほぼ全域に及んでおり、ほとんどが手斧、やりがんなで加工された材の残片であり、わずかに部材状の残欠もある。また北西区中央付近の土坑SK7699を中心とした狭い範囲から大量の檜皮片も出土した。一端を切り取った長さ60cmほどの細いものから微細な切片にいたるまで、まとまった形で投棄されていた。

(井上和人)

瓦塙類 池SG7700とSX7701中から、多量の瓦塙類が出土した(表10)。軒丸瓦6138A・F～J型式、軒平瓦6767A・B型式、6768A～D型式は阿弥陀淨土院所用とされてきたが、今回もまとまって出土した。軒丸瓦6138M型式(図66-2)は新型式。単弁蓮華文で外区は素文縁、弁数13、中房蓮子1+6、瓦当径14.9cm。平城京左京一条三坊二・三坪間の一条条間路から同範品が1点出土。

他に、施釉瓦4点、(緑釉)水波文塙1点、刻印瓦9点が出土した。施釉瓦の内、1点は平瓦凹面に墨書があり、「施米賀」と読める(図67)。同じ面に緑釉がわずかに遺る。残存長8.0cm、厚さ1.5cm。他の3点はいずれも二彩瓦である。(緑釉)水波文塙(図66-1)は残存長7.9cm、厚さ4.0cmの小片で、側面に逃げをとつて、線刻で文様を表現しており、平城京左京一条三坊十五・十六坪や、伝法華寺出土(東京国立博物館蔵)の緑釉水波文塙に類似する。本例は、肉眼では釉を確認できないが、非破壊分析の結果、緑釉の成分が表面に遺存していた。刻印瓦には、初出土の「一」や、「三」、「四」(目?)、「七」、「八」のほか「二」、「五」かと思われる刻印を押す。

(清野)

木簡 木簡は南西区東端の池SG7700の堆積土から1点、北西区の埋甕SX7686の埋土から削屑6点、計7点出土した。「參河國遠江国」というように国名を列記したものと

表10 第312次調査出土瓦塙類集計表

軒丸瓦						軒平瓦						
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数	
6131	A	1	6285	?	2	6663	C	4	6725	A	2	
6137	C	2	6308	A	1		?	1	6751	A	3	
6138	A	5	6311	?	1	6664	F	1	6767	A	10	
	B	5		A	1		?	1		B	5	
	F	17	6313	Aa	1	6667	A	6	6768	A	3	
	G	11		G	2	6685	B	1		B	4	
	H	27	6320	Ab	1	6691	A	1		C	14	
	J	1	7283	A	3	6713	A	1		D	1	
	M	1	鎌倉		26	6714	A	1		?	1	
	?	19	中世巴		1	6716	A	1	平安		1	
6225	A	1	近世巴		1	6719	A	1	鎌倉		15	
	?	1	型式不明		8		C	3	中世		1	
6282	?	1					Ga	1	近世		1	
6284	B	1					H	1	現代		3	
	Ec	1					J	1	型式不明		7	
6285	A	3					?	1				
軒丸瓦計						145	軒平瓦計					
丸瓦	平瓦	塙	凝灰岩	道具瓦他								
重量	334.9kg	863.3kg	14.6kg	0.7kg	鬼瓦	1	熨斗瓦	1				
点数	1,670	4,458	8	2	水波文塙	1	箆書平瓦	1				
					施釉瓦	4	刻印瓦	9				

考えられ、荷札木筒ではなく帳簿様の木筒の断簡か。同じ場所からは、上部左右に二対の切り込みがある封緘状木製品も出土している。SX7686出土の削屑のうち1点は「言」と読めるが、旁がある可能性がある。(渡辺晃宏)

土器 池SG7700を中心に整理箱5箱分出土している。その内注目される2点について報告をおこないたい。

図68-1は、須恵器杯Aの底部外面に被り物をつけた男性像を描いた墨画土器である。床土より出土。図68-2は、奈良二彩の壺の胴部と考えられる。外面は緑釉と透明釉がかけられている。透明釉の一部にやや赤みがかった部分があり、三彩の可能性も考えられる。蛍光X線分析をおこなった結果、鉄の比率は他の部分より多いものの、呈色材として用いられたものかは特定できなかった。内面はロクロメがみられる。池SG7700出土。(金田明大)

4. 検出遺構の解釈と課題

SX7680B、SX7685B、SX7690の構造 碇石落し込み穴群SX7680B、SX7685B、SX7690は、土層の層序関係から、いずれも池と併存し、その中に建てられていた礎石建物跡と考えられる。SX7685B、SX7690の周囲には、礎石落し込み穴の部分をのぞく全面に池底の石敷を舗設するのに対し、SX7680Bだけは、東端の1間分を除き、池底の石敷が全くみられず、礎石を敷いて整地する(SX7684)。加えて、SX7680Bの埋土から長さ1.5m程度の大きな礎石や、出柄の付く礎石が出土していることを考え合わせると、他の2者とは異なる大型の建物と推定される。SX7685B、SX7690もSX7680Bと柱筋、柱間がそろうので、これと一連のものとみられる。但し、本格的な礎石建物というよりも橋か廊などの付属施設の可能性が高いと思われる。また、SX7680Bの床下部分に位置するSD7691、SK7696～

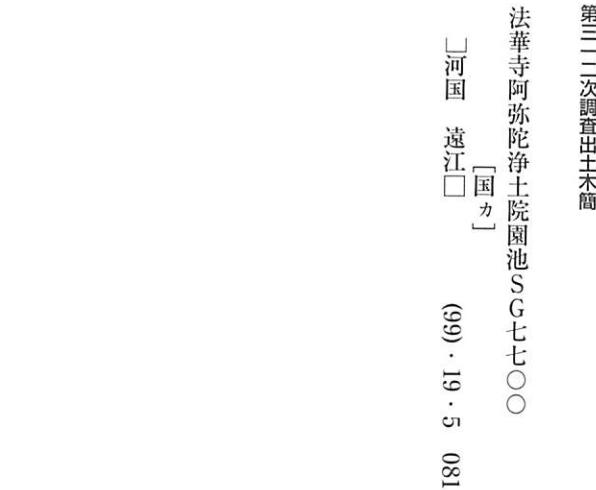


図67 第312次調査出土墨書瓦「施米賀」

7698は水中に建つ特殊な礎石建物の床を支持するための地業痕跡であったとも解釈し得よう。

SG7700下層の解釈 地中レーダー探査の結果、池SG7700が上下2層に分かれる可能性がでてきた。一方、発掘調査の結果では、池底の石敷が現存しない部分から礫混暗灰色砂が検出されており、下層の池に関連する可能性をもつものとして注目される。つまり、礫混暗灰砂を礫敷の池底整地層とみることもできるわけである。

まず、石敷を上層、礫敷を下層の池底とみた場合、下層の礫敷を全面改修して石敷とし、上層の石敷が抜けてしまった部分から下層の礫敷が見えている（全面改修案）、または、下層を一部改修し、礫敷を利用しつつ、部分的に石敷を追加し、両者を併用した（部分改修案）と考えることができよう。

ところでSX7680Bの周囲には礫敷整地層SX7684が存在する。これは礎石建物の床下部分の地業とも解釈できるが、これも同様に下層の池底と考えることもできる。上層の石敷を造る際、建物の床下になる石敷を省略したものと推定できよう。

つぎに、下層が存在しないとみた場合、礫敷と石敷に時期差はなく、単なる工程差と解して、両者を併用した（工程差案）ものと考えることができる。また、礫混暗灰砂は池底の施設ではなく、単なる自然堆積と考えることも可能である。

池底に石敷を部分的に施す例は東院園池下層SG8500Aにみられ、部分改修案や工程差案のように、池底に異なる2つの仕様を併用するとしても不自然ではない。しかし、いずれの案も、石敷の下層を精査していないため決定的な証拠を欠き、現時点では不明とせざるを得ない。

SG7700と下層掘立柱建物との関係 SX7680A、SX7685Aは、礎石建物の下層に存在する掘立柱建物跡であるが、これらと池SG7700が併存したか否かは、下層遺構の性格

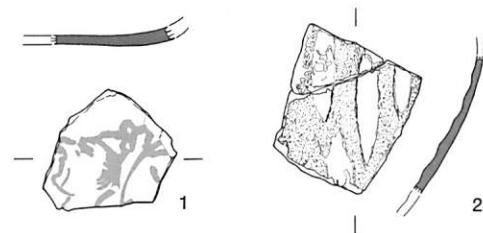


図68 第312次調査出土土器 1:4

を考える上で非常に重要である。

下層掘立柱建物の柱穴は、掘形、抜取穴ともに池底の堆積土に覆われることから、池より新しくならないことは明らかである。しかし、両者が併存したか否かはいずれとも判断しがたい。建物を建て替える際に、地盤安定のための地業として、いったん池底の堆積土を除去した可能性も捨てきれないからである。従って、これも現時点では不明としておき、今後の調査にゆだねたい。

5. 調査成果とその意義

今回の調査では、いくつかの注目すべき知見が得られた。以下に列挙しておく

①阿弥陀浄土院の中心部分に園池の存在を確認したこと。従来から園池の存在は想定されてきたが、実際にその遺構を確認したのは今回が初めてである。

②阿弥陀浄土院下層遺構の存在を確認したこと。礎石建物の直下において掘立柱建物跡を検出したことは、これが池と併存したか否か現時点では不明であるものの、この地の阿弥陀浄土院以前の様相を考える上で重要な材料となる。下層遺構については、造営当初の阿弥陀浄土院とみることも不可能ではないが、阿弥陀浄土院の前身遺構である可能性も十分にあるだろう。

一方、法華寺には、光明皇后に関わる写経事業を行った外嶋院などの施設があったことが知られている。嶋とは園池のことであり、今回検出した下層遺構を阿弥陀浄土院の前身遺構とし、これに園池が伴っていたとすると、その有力な候補となりえる。光明皇太后の一周年忌斎会に間に合わせるべく、1年という短期間で建立されたことが事実であるならば、その前身施設を利用した蓋然性は極めて高いといえる。

③阿弥陀浄土院園池を奈良時代にさかのぼる浄土庭園と見なせること。今回検出した阿弥陀浄土院園池は、浄土信仰に基づいて造られていることは明らかであり、建物と庭園が一体となって表現されることから、平安時代後期以降に急増する浄土庭園の先駆けとなる遺構として位置付けることができよう。

（清野）